

ホラーティウスのカルミナ III₁₋₆ について(2)

松 田 治

故郷とローマ

序論¹⁾ でいくつかの問題を指摘したあとたえず筆者の念頭を去ることのなかった問いがある。ホラーティウスにとってローマとはいったい何であったのか、ということである。III₁₋₆で過去、現在そして未来の世代をも含めて詩人がわれわれにかいま見させるローマは花の都としての面影に乏しく、むしろ苦悩の種を深く宿した病める都の観が強い。その都は第1篇の最後のスタンザで称えられるサビーナの谷とは強い対照をなしている。彼が地方生活を称えるにあたっては、地方からローマへ来た人間の常としてそこに故郷の姿が投影されている、と考えることができる。詩人の生地は Apulia と Lucania が境を接する付近にあるウェヌシア (Venusia) という田舎町²⁾ である。彼は10歳になるかならない年頃³⁾ にこの地を離れてローマへ行った。以前奴隷であった彼の父にとってこの出郷は大きくいて二つの意義があったと考えられる。一つは自分がある時期まで奴隷として過ごしてきた土地を離れることによって、過去の一切を葬り去ること、もう一つは、この田舎町の学校での教育だけで終わらせるには惜しいようなある程度の将来性を示したでもあろうわが子、それも自由身分の人間として生まれた息子にできる限りの教育を施すために、機会の多い都へ出ることである。過去と絶縁するというならとく

にローマを選ばなくともすむであろうし、どだい根本的には土地を換えてそれで片のつくような問題ではない。いみじくも詩人自ら語っているごとく⁴⁾、ここでは、われわれは父の善意、慈愛を見るべきであって、子の教育ということに大いに重きをおいてのことであろう。この配慮に恵まれなかったなら、詩人の大成があったかどうかはなほだ疑問であるといわざるをえない。

さて、かく幼い時期に故郷を離れたホラーティウスはその当時、父の上京の意図は幼いなり理解しかできなかつたであろう。Apulia の山々に別れを告げる父の胸中には少年の図り知ることのできぬ多くの事柄が去来したであろう。山や川のたたずまいも樹木や草花の色彩も2人にはそれぞれ異なって映ったはずである。詩人は生い育った地の風物色彩を忘れることはなかった。彼は「ウェヌシアの森」⁵⁾とか「ウェヌシアの農夫」⁶⁾、あるいは「アプリアの狼」⁷⁾、「疲れを知らぬアプリアの男」⁸⁾、「ルカニアの雪」⁹⁾、

4) Sat. I。は解放奴隷であった父への賛辞。ローマでの教育について「私の父はちっぽけなやせた畑の持主で、貧乏人ではあったけれども、お偉い大隊長たちの、嵩きた子供が左肩に、鞆と板(タブラ)をぶらさげて、月の半ばに八文の月謝を払ってかよっているフラーウィウスの学校には、この私を送らずに、元老院議員や騎士たちが、子弟にさずける教育を、自分の子にもさせたいと、私をわざわざローマまで、つれていっしょにやってきました」と語り、また「現在私は、父が私にしてくれたことについては、心からうれしく思っており、父に感謝をささげている。私がまともである限り、この父親を恥じるなどということは決してないだろう」といっている(鈴木一郎氏訳『ローマ文学集』、筑摩書房)。

5) “Venusinae silvae” (c. I_{29,26-27})。

6) 注2)参照。

7) “Apulis lupis” (c. I_{33,7-8})。

8) “impiger Apulus” (c. III_{1,6,26})。

9) “nive Lucana” (sat. II_{3,234})。

1) 拙稿「ホラーティウスのカルミナ III₁₋₆ について(1)」『流通経済論集』, Vol. 4, 1970. 2, 72-83頁。

2) “Sequor hunc, Lucanus an Apulus, anceps; nam Venusinus arat finem sub utrumque colonus” (sat. II_{1,35-36})。

3) Jacques Perret, *Horace*, 1959, p. 11. Pierre Grimal, *Horace*, 1958, p. 11.

「ルカニアの猪」¹⁰⁾などといった何気ない表現によって故郷とその周辺の風物を、地名そのものを教えてくれるが、とくにわれわれの注意を惹くのは問題の6篇中の第4篇における記述である。ここでは幼時期の思い出が多分の技巧のうちに語られている。

me fabulosae Volture in Apulo
nutricis extra limina Pulliae
ludo fatigatumque somno
fronde nova puerum palumbes
texere, mirum quod foret omnibus
quicumque celsae nidum Aceruntiae
saltusque Bantinos et arvum
pinque tenent humilis Forenti,
ut tuto ab atris corpore viperis
dormirem et ursis, ut premerer sacra
lauroque conlataque myrto,
non sine dis animosus infans¹¹⁾. (III_{4,9-20})

この事件がもし実際にあったことだとすれば、確かにホラーティウスはこのとき早くも世間の評判になった¹²⁾ことは間違いない。保護者が一刻も目を離せぬ年齢の子供が一人で家を抜け出して、蛇や熊の出没する山中へ迷い込み、遊び疲れてすやすや眠っていたのだから、それは確かに‘non sine dis’な出来事として人々の話題になったであろう。ギリシャの詩人たちについて、その幼少期の出来事が、彼らに神々より与えられる加護を強調するため、詩的雰囲気

うちに美化されて語られる例がある¹³⁾。ここでホラーティウスが事実をありのままに報告しているのかまたは、わが身はかく幼い時分から神々の保護を得ているのだと語るためにこの愛らしい一幅の絵を描きあげたのか知る由もない。しかし、サビーナの小領地にいた時に一本の呪われた木が倒れてきて危うく命を落としそうになった時¹⁴⁾も、ピリッピイの戦場から命からがら脱げ出した時¹⁵⁾も、またシキリアの荒浪に洗われるパリヌルス岬を無事に通りすぎた時¹⁶⁾も、神々の助けがあったとして来し方実際に体験した危難を語っている例もあり、ここでも、成熟した詩人の技巧を割引いて考えてもこれに近い事件があったと考えてよいだろう。このような出来事は幼い精神に深い痕跡を残すものであり、しかも当人が幼いうちにその土地を永久に離れたとなれば、それはたんなる感傷的な郷愁の域を越えて、その人の心の中で一種の神話となることも可能である。この種の場面はいつになっても鮮やかに蘇るものだ。こういった状況でホラーティウスが想起する故郷は父のそれとは別種のものであったろう。

アドリア海に注ぐ前にアプリアを流れる川 Aufidus も故郷を思い出させるよすがとなる。音高く (longe sonantem Aufidum, c. IV_{9,2})、荒荒しく (violens Aufidus, c. III_{30,10}; tauriformis Aufidus, c. IV_{14,25}) 流れ、ある時は人の命をも呑み込む (cum ripa simul avolsos ferat Aufidus acer, sat. I_{1,58}) この川の音は幼い者の耳底に快い響きを残して、いつまでも消えることがなかった。山、川があり、樹木草花、狼や猪があっ

10) “Lucanus aper” (sat. II_{8,8}).

11) 「小さいころ、アプリアのウォルトゥル山で、乳母プルリアの家の外にでて遊びつかれ眠りづかれてしまった私を、おとぎ話の鳩たちが新しい葉でくれた。高いアケルンティアにあるねぐら、パンティアの森、低いフォレントゥムの沃地などに住むあらゆる人々にとって奇蹟にも思えたのだった、私が黒い蛇や熊に傷つけられずに眠り、神々に守られた勇敢な子供として、よせ集められた神聖な月桂樹とミルテに埋もれて横たわっていたのは。

12) Richard Heinze *Die Augusteische Kultur*, 1960⁸, S. 125.

13) ステシコロスについて “[luscinia] efficaci auspicio ……in ore Stesichori cecinit infantis” (Plin. n.h. X₈₂), ピンダロスについて “μέλισσαι καρθεύδοντι

προσεπέτοντό τε καί ἐπλασσον πρὸς τὰ χεῖλη τοῦ κηροῦ (Paus. IX_{23,2}). いずれも Kiessling-Heinze 引用 (Q. Horatius Flaccus, *Oden und Epoden*, erklärt von Adolf Kiessling, besorgt von Richard Heinze, 1968)¹³.

14) C. II. 17,27-30 “me truncus inlapsus cerebro sustulerat, nisi Faunus ictum dextra levasset, Mercurialium custos virorum”, 他に II_{13,1=5}, III_{4,27}, III_{8,6-8}.

15) C. II_{7,9-14} “tecum Philippos et celerem fugam sensi, ……sed me per hostis Mercurius celer denso paventem sustulit aere”, 他に III_{4,26}.

16) C. III_{4,25-28} “vestris (=Camenarum) amicum fontibus ……non me ……exstinxit arbos …… nec Sicula Palinurus unda.”

て一つの田園風景が成立する。そこでの日常生活を詩人は忘れなかった。忘れるどころかむしろそれは理想とすべき生活にも思えたのである。

non his iuventus orta parentibus
infecit aequor sanguine Punico
Pyrrhumque et ingentem cecidit
Antiochum Hannibalemque dirum,
sed rusticorum mascula militum
proles, Sabellis docta ligonibus
versare glaebas et severae
matris ad arbitrium recisos
portare fustis, solubi montium
mutaret umbras et iuga demeret
bobus fatigatis, amicum
tempus agens abeunte curru¹⁷⁾. (Ⅲ_{6,33-44})

父親が出征している間は母親が家庭の柱となって働き、子供らをしつける。かれらはおそらく朝早くから野良に出て母の指図にしたがってきばき仕事をすませる。山影が深く長くなって夕闇が迫るころ漸くその日の労働が終りに近づき、薪束をかかえて、これも仕事で疲れた牛を連れて、家路をたどる。影に包まれた谷あい吹きぬける風が額をぬらしていた汗を少しづつふき取っていく。ほの暗い灯のもと、夕餉の語りもうすぐだ、心なしか歩みも早くなる。こういうふうな生活でもあったろうか、こうして田園の子供らは成長していく。農事は辛く、休息を与えない。母の指図にしたがって働くかれらの心に都会的な脆弱さが入り込む隙はない。こうして一人前になった若者たちが、今度は父

に代わって戦場へ赴く。かれらの鍛えに鍛えた剛健な力は遺憾なく発揮される。苛烈な兵役生活を、むしろこれを友とするまでに耐えねばならぬ¹⁸⁾として、詩人がⅢ₂の冒頭で若いローマ兵士に声高く要求している徳、軟弱な生活に馴れてしまった者にとっては仲々到達しがたい忍耐の徳を、かれら田園に育った若者たちはすでに身をもって体得しているのである。その結果として克得られたのが対ピュルルス戦(前275年)であり、対ハンニバル戦(202年)であり、対アンティオクス戦(190年)であった。ここで詩人が理想として謳っているのは2~3世紀以前の若者の姿であり、当時、地方でならともかく、ローマにおいてはほとんどみられなくなったものである。また地理的にいうとサビーナはローマに近く、詩人の故郷ウェヌシアとは遠く隔たっている。しかし時代と空間の距離があるとはいえ、ここにも彼が幼い頃に故郷で見聞きした農家の生活が幾分なりとも反映しているとみてよいだろう。彼の父も、貧弱で小っぼけなものだったとはいえ、いちおう自分の土地を所有しており¹⁹⁾、そこでやはり農耕生活の一端はみることができたはずである。

労働で呻吟する者の永遠の夢は働かずに食べていくということに尽きる。この虫のいい見果てぬ夢が人間に古代から現代にいたるまでさまざまな形のユートピア風景を描かせてきた。絶望的な政治、社会の現実直面してのことではあったが²⁰⁾、ホラーティウスもその例に洩れない。最初期の作品に属する epod. XVI で、“divites insulae”, すなわち「至福者の島」²¹⁾を理想郷として描いている。そこでは、労働しなくても毎年の収穫が約束され、ブドウ、オリーブ、イチジクなどの果実も人の世話を要しない。蜂蜜も畜乳も豊かで、熊や蛇に脅かされることがなく、季候温和である。ここに行けるの

17) 「このような親から生れたのではなかった、カルタゴ人の血で海を染め、ピュルルスや大王アンティオクス、兇悪なハンニバルらを打倒した若者たちは、それは農村出の兵士たちの男の児らであり、彼らはサビーナの鋤で土を掘り返したり、厳格な母の言いつけで、太陽が、山々の影を移しそして、日輪の去ると共に親切な時間(=夜)を導いてきて疲れきった牛どもの軛を外してやる時分になると、切り落してあった薪を運んだりするようになってしまう。」

18) C. III_{2,1-3} “Angustam amice pauperiem pati robustus acri militia puer condiscat.”

19) 注4) 参照。

20) 前41年 Perusia (今日の Perugia) で Octavianus と L. Antonius が相争って市民の多くに恐怖と絶望を感じしめた内乱の頃の作品。

21) C. IV_{8,27} にも同じ表現がある。ヘシオドスの “αἰ μακάρων νῆσος” (Erga, 171) に同じ。

はローマ市民の中でも少数の敬虔な (pius) 人々、いわば当時としてまったくローマ的でない人々だけである。世代は金の時代から鉄の時代まで下降してきたが、ローマは今まさに混迷、破滅の時代を生きている。ここから脱出しようではないか、と詩人は提案して理想郷をかく描写した。あくまでも夢物語にすぎず、文学的・神話的遺産の一例であるが、ここでは現在のローマ的なものは完全に排除され、ただ田園の空気だけが流れているのである。

最後にここでホラーティウスの描く田園風景の例をもう一つあげよう。この作品 (epod. II) で詩人は、都会人、それも人にもっとも嫌われるタイプの金貸しが、都会で東の間殊勝な気分になって思い描いたものという形での田園風景をつづっている。したがってその内容はいわば百科事典の「田園生活」項目を読むごとくで、つぎからつぎへと楽しげな風景が展開される。最後の4行はこの人物の現実の行動を語って読む者を笑わせ、詩人のひやかし気分が明らかになる。しかし、Villeneuve²²⁾がいうように、これは、マエケーナースからサビーナの土地を贈られ (前31年頃)、ささやかながらも地主となったホラーティウスがその新鮮な喜びにひたっている時分に書いたもので、細かい記述には彼自身の体験にもとづくものが多いと考えられる。少々長くなるが全文訳出してみよう。

「幸せ者とは、商売から遠ざかって、大昔の人たちのように自分の牛で親ゆずりの畑を耕やし、金の貸借りのない人、兵隊なみにけたたましい喇叭で起こされることなく、荒海を恐れる必要もなく、そしてフォルムや有力な市民の高い敷居を避ける、そういう人のことだ (1~8)。だから彼はブドウの伸びた若枝を高いポプラにからませたり、谷間のくぼ地で牛たちが群れて歩き回るのを眺めたりする。むだ枝を鎌で切り落としてもっとましなのを代りに接いだり、あるいはきれいな壺に搾り取った蜜を入れ、あるいは温和しい羊の毛を

刈る (9~16)。さて、秋が、野畑で、熟れた果実で飾りたてたその頭をもたげるとき、接木で実った梨をもぎ、紫と色を競うブドウを摘む、その喜びよ、あなたに、プリアプスよ、またあなたに、父なるシルウァヌスよ、境界神よ、お贈りするために (17~22)。彼は、ある時はうばめがしの老木の陰で、ある時は茂った草むらで、ねころんで楽しむ。そのかたわら、高い岸の間を水が流れ、森で小鳥たちがさえずり、そして木の葉²³⁾は、流れる水にささや音を合わせ、微睡を招く (23~28)。だが、いかづち揮うユーピテルの冬の季節が雨やら雪やらもたらす折は、彼は、あちこち猟犬の群を従えて、行く手ふさぐ罨に猛き猪を追い込み、また、なめらかな竿に目の粗い網を張り、貪欲なツグミの罨にする。また臆病な兎や通りがかりの鶴を罨にかけて捕える。素敵な獲物だ (29~36)。いったい、こんな楽しい暮しをしながら、色事から生じるいやな心配ごとを忘れぬ人がいようか？ もしも慎ましい妻君がそれなりに家と可愛い子供たちの面倒を見てくれるなら、もしもサビーナの女のように、あるいは敏捷なアプリア男の、日に焼けた妻のように、彼女が古い薪を、夫がくたびれて戻ってくる時分に、神聖なかまどに積んでくれるなら、またもしも、編枝作りの柵に肥えた羊をとじ込めて、彼女が、そのふくらんだ乳を搾るなら、また、今年のブドウ酒を甘い壺から汲みながら、銭金かからぬ食事を整えてくれるなら (37~48)、ルクリース湖の貝といえども、カレイも、タイ (そのいくつかを東方の海上で吹き荒れる嵐がこちらの海へ追い寄せてくれたとして) も、またアフリカの鳥やイオニアのシャコが私の胃袋に入ったとしても、私はおいしいなどとは思わず、木々のもっとも実り多い枝から摘んだオリーブや、野を愛して茂るカタバミ草や病人に益あらたかなアオイや、あるいは、テルミナーリア祭の犠牲にされた子羊や、狼から奪

22) F. Villeneuve, *Horace*, t1, Odes et Épodes, 1929.

23) Kiessling-Heinze に従って “frondesque”, をとる。

い返された小山羊、など以上には(49~60)。こんな食事をしながら、たらふく草を食った羊たちが小走りに家へ戻り、くたびれた牛たちが、裏返した梨ペラをだるそうに首にかけて運び、また、豊かな家を埋めつくす、家生れの召使いたちが、かがやかしい守護神を囲んで食卓につく、そんな様子を眺めるなんて、大した楽しみだ」(61~66)。かく語って高利貸アルフィウスは、田舎者になろうと大忙がしで、貸した金をすっかり月の中日に取り立てたかと思うと、もうこんどの月の初日に備えて投資先を探す始末(67~70)。

さて、このように称えられ、想い起こされる故郷、田園に比べて、当時のローマはどういう形で詩人の眼に映ただろうか。この6篇でそれは明瞭に現われているように思う。得るよりは失うものの方が多かったローマ、墮落しきったローマ、神々をないがしろにしたために却って見放されてしまったローマ、世代を重ねるごとに悪くなっていくかのごときローマ。上に引用した第6篇の3聯(33~44)に直接先行する3聯(21~32)は、サビーナの若者たちとは正反対の生活を送る若い女性の姿を描いている。

motus doceri gaudet Ionicos
matura virgo et fingitur artibus
iam nunc et incestos amores
de tenero meditatur ungui:
mox iuniores quaerit adulteros
inter mariti vina, neque eligit
cui donet inpermissa raptim
gaudia luminibus remotis,
sed iussa coram non sine conscio
surgit marito, seu vocat institor
seu navis Hispanae magister
dedecorum pretiosus emptor²⁴⁾。(Ⅲ_{6,21-32})

24) 「成長した乙女はイオニア風の踊りを喜んで学び、もうすでに手管を仕込まれる。それに彼女は爪も柔かい時分から淫らな色恋を胸に描いているのだ。(結婚して)彼女はやがて夫のいる酒席でもっと若い愛人たちを求め

この乙女、そして妻女が今のローマの精神風土の一端を象徴している。ここでは新旧二つながらの女像が並べられているが、同じ不実を働くのでも、かつての女性は相手を自分で選んだ、すなわち恋愛感情を支えにしていた。そして自分の行為に対する恐れから、あるいはわずかながらにも残された羞恥(かく呼べるなら)から、大急ぎで、灯を遠ざけて事を行なったのである。ところが今日のローマ女性の場合はもはや不実とさえいえぬ破廉恥この上ない行為であり、年端もゆかぬ頃から“incesti amores”を思い描き、成長しては教養ならぬ娼婦の“doli”²⁵⁾を身につけて、この類の技を実践するのである。この女性にはサビーナの母親や、アプリアの農婦²⁶⁾を思い出させるものはひとかけらもない。また詩人が同じく第三巻の第24篇で語る女性とは対極にある。この作品で詩人は、ローマ市民の持ちがちな中華思想によって一般には蔑まれる例に洩れなかったであろうゲタエ人やスキュタエ人の自然人的生活を高く評価しているのであるが、とくにその女性像がいま述べたローマ女性のそれとあまりに隔たっていることが注意を惹く。「そこでは、女性は、母を失った継子らを優しく心をこめていたわり、妻が持参金によって夫を支配することはなく、また見目よい男の誘惑にのることもない。大いなる持参金、それは、両親の徳²⁷⁾であり、また、固い絆ゆえに第二の夫を恐れる貞潔である。これを破ることは禁じられている、さもなければ死をもって報いられる」²⁸⁾。このあと、神を恐れぬ殺戮、内訌

る。そして、気ぜわしげに、明りを遠ざけて、禁じられた喜びを与える相手を選ぶのではない。面と向って名ざされるや彼女は、夫も承知のもと、立ち上がる。彼女を呼ぶのが行商人であろうと、高い値で醜行を買うヒスパニア船の船長であろうと。」

25) Kiessling-Heinze, ed loc.

26) 本文、13-14, 25頁参照。

27) Gordon Williams は *Parentium* を *dos* にかける。
The Third Book of Horace's Odes, 1969, p. 124.

28) “illic matre carentibus privignis mulier temperat innocens, nec dotata regit virum coniunx, nec nitido fidit adultero; dos est magna parentium virtus, et metuens alterius viri certo foedere castitas, et peccare nefas, aut pretium est mori” (17~24).

に終止符を打とうとする者は誰であれ、もし諸都市の父 (PATER urbium) として後々の世まで名を残したければ、今日彌漫しているとめどない放縦放埒の風 (indomita licentia) を抑えねばならない、と続いているように、あくまでもローマの退廃を強烈な対照によって浮彫りにするために、この地方の家庭生活²⁹⁾を称えている。一方では継母が継子らを優しくいたわるというのに、他方では「恐ろしい継母たちは色蒼ざめる毒を盛る」³⁰⁾。ローマでは持参金の有無が女性の生き方を大きく左右する。これのある者は家庭で気ままに振舞い、夫を夫とも思わぬような生活に走る。また無ければ無いでその不足を貞操と引換えに補おうとする。いずれにしても家庭の崩壊を招く大きな要素であることに変わりはなく、この危険な種子の発芽を防ぐには血の通わぬ法律文書³¹⁾がいくらできて無駄であり、ローマ市民としての良心、徳の意識の回復が待たれるのである³²⁾。これに反してゲタエ人やスキュタエ人の場合は、親ゆずりの徳、そして初婚の誓いに順じて二夫にまみえずとする貞操こそ、なによりの持参金となる。彼の地においては、夫婦のこの固い絆 (certum foedus) を破ることは神に反く行為に等しいもので、女性は死をもって罪をあがなわねばならない。ところがローマでは、死の代りに、情事の相手から贈物をもらうことができるのである。妻が妻なら夫も夫で、勘定づくでこういう醜行を黙過する。両者の墮落に本質的な差異はない。このような男女を親にもつ子供たちは早くから悪しき環境に馴染んでしまう。かれらが行く末どんな人物になるかも目に見えている。

29) スキュタエ人、ゲタエ人は一種の共産生活を営む放浪民族で、その共有の論理は女性問題にも及んだとされる。だからここで詩人のいう妻の操は実際には云々するには当たらぬ問題で、彼の想像と制作意図の結果である (cf. G. Williams, *op. cit.*, p. 125).

30) “lurida terribiles miscent aconita novercae” (Ovid. *met.* I.147).

31) C. III.24,33-6 “quid leges sine moribus vanae proficiunt.”

32) アウグストゥスに始まる帝政期における家庭崩壊の状況については、J. Carcopino, *La vie quotidienne à Rome à l'apogée de l'empire*, pp. 112-24 参照。

往時ローマ市民が誇りにしていた徳 (virtus) はすっかり忘れられ、地方人の日常生活によって培われる質素剛健といったものを自分の生活の理想として取りこもうとするような心意気を一般のローマ市民の中に見出すことはまったく不可能である。ここから展望されるローマの未来は闇でしかなく、第6篇ではこのペシミズムが色濃く流れている。第1聯は市民全体への格調ある呼びかけである。現在のローマの憂うべき状態は現在の世代が直接招いたものではなく、何代も前から積み重ねられてきた諸悪の結果である。とくに神々をないがしろにしてきた罪はたとえようもなく重い。かといって今日の世代がこの状態をわが責任に非ずと置いて放置してよいというものではない。かれらは、数世代も前の親たちが捨ててしまった敬神の念を取り戻し、かつ、寂びれたままになっている神殿を再建し、煤で汚れた神像を作り直さぬうちは、祖先の罪を自ら償わねばならないのだ。身に覚えのない罪の償いをさせられる (Delicta maiorum inmeritus lues) 世代に対するこの呼びかけ、警告は、その贖罪が成就した場合の希望を予示すると同時に、ローマにおける神々の位置がそれまでどのあたりにあったかを如実に物語るものである。第6篇はかく始まり、途中で、罪深い時代に必然的に生じる婚姻、氏族、家庭の崩壊を語り、すでに挙げた妻女に代表される頹廢を難じ、そしてこういった世相がもたらすべき未来を最後の一聯で結論として述べている。

damnosa quid non inminuit dies?

aetas parentum peior avis tulit

nos nequiores, mox daturos

progeniem vitiosiore. (III.6.45-48)³³⁾

この文章には詩人が現在のローマに対して抱く諸々の否定的な感情が煮詰められているとみてよい。ここにいう“damnosa dies”の力は

33) 「破壊的な時が何か破滅させなかったものがあろうか。父らの時代は、祖父たちのより悪いが、もっと悪辣なわれわれを生んだ。やがてわれわれが、輪をかけて性悪な子供らを生むことであろう。」

ソポクレスの *πάνθ' ὁ μέγας χρόνος μαρτυρεῖ* (強大な時はすべてを消し去る)³⁴⁾ に比せられる。この時という強靱な破壊力をもつ浪に弄ばれて喘ぎつつ漕ぎゆく先さえ定かならぬのがホラーティウスが面のあたり見ているローマの現状である。相つぐ内乱で国土、人心ともに荒廃し、同じく神々もうち棄てられている。このような時代精神が継続されるとすればどのような結果になるか明らかである。ホラーティウスは未来という時間にはさして重きを置かぬ人である³⁵⁾。それでも第6篇でたとえいかに暗澹たるものであろうとも一つの未来図が示されているのは、当時の社会諸相における人間の精神活動の低迷がいかに顕著であったかを物語っている。オクターウィアヌス(27年からアウグストゥス)が国家宗教の復興を企図して荒れるがままだった神殿を再建し始めたのは前28年³⁶⁾のことであるが、この事業が、たとえ一時的に大衆の目を奪う効果はあったにしても、かれらの魂に及ぼした影響がなにほどのものであったかは、28年前後に成ったこの作品が23年出版の詩集に納められたということ自体でおおよそ察しがつくといえるのではないだろうか。と同時に、この最終聯にみられる悲観的な未来像を決定的なものとする必要もないであろう。この詩の序である第1聯に提示された条件、すなわち神殿を再建するなどして“*pietas*”を取りもどすという条件が満たされるならば、より良い時代が期待できるだろうと詩人は示唆しているのである。この仕事を遂行するのが、今日の若い世代に課された義務である。かれらはこれまでの世代と同じ歩調で同じ道を歩む限り、より深い奈落へ落ち込むことは間違いない。それゆえここで詩人はローマの現状を重い口調で語り、将来を担うべきこの若い世代に忠告を与えているのである。そうすると、第1篇の第2聯で、誰もまだ聞いたことの

ない歌 (*carmina non prius audita*) を君たちのために歌おうと呼びかけられる少年少女ら (*virginibus puerisque*) は、ここ(第6篇)で呪われている新たな世代と同一のものであると考えることができる。第2篇冒頭の若いローマ兵士も同様である。Ⅲ₁の第1聯はだから、詩集編纂の際に、第6篇がこのシリーズの最後に置かれると同時に、新たに全体への序として作成されたとの推測を可能にする³⁷⁾。筆者はこの“*carmina*”という複数形がこの6篇を指しているものであると考えたい³⁸⁾。

神々の座

ローマの現状は代々重ねられてきた緒悪の結果であり、とりわけ、神々をないがしろにしてきた罪は例えようもなく重い、というのがⅢ₆に表現された詩人の考えであると前章で述べた。ホラーティウスは、多くの古典作家と同様に、作品中でしばしば神々の名をあげるが、これは古典文学の重要な表現方法の一つである。しかし一般に *épicurien* とされているこの詩人がⅢ₁₋₆で語る神々の姿は一見独特の観を与えるであろう。そこでは他の作品と違って神々に対する深い関心が、たんなる表現の問題を超えたものとして読み取れるのである。エピクロス派の学説に深く馴染んでいた³⁹⁾詩人が、なぜかく声高く世の多くの人々が思い描いているような姿での神々⁴⁰⁾の復活を叫ばねばならなかったのか。この問題に沿って小論を進めていくが、周知のとおり、詩人の考えがオクターウィアヌスの宗教政策と関連していることは疑いえない。詩人が自らここで描いている神々の存在をその時点で信じていたか否かについては議論も分か

37) Eduard Fraenkel, *Horace*, 1957, p. 262 参照.

38) 拙稿, 前掲論文 (1), 81頁.

39) たとえば c. I₃₄ の *insaniens sapientia* (気違い哲学) はエピクロス派の哲学をさすものとされる.

40) 「神々はたしかに存在してはいる。神々に関する認識は直接の明証性をもっているのだから。しかしその神々は、世の多くの人々が思い描いているような姿ではない。なぜなら彼ら自身、自分たちが考えている神々の姿を、いつも守り通しているとは言えないからだ」(エピクロス『メノイケウスへの書簡』森進一氏訳, 筑摩書房).

34) Kiessling-Heeinzle 引用.

35) たとえば “*dum loquimur, fugerit invida aetas: carpe diem, quam minimum credula postero*” (cf. I_{11,7-9}) のごとき表現がある.

36) *Res Gestae* 20.

れるであろうが、筆者にとってはここでの誠実さを疑う理由はいささかもないように思える。そこに新生ローマの新しい指導者たるべきオクターウィアヌス（以下アウグストゥスとする）への全幅の信頼、あるいは友情をみるというのは、言過ぎになるだろうか。この新しい指導者が Augustus (3, 11; 5, 3), Caesar (4, 37) の名で登場することを、われわれは詩人の抱くそういう感情が率直な表現を得たものであると考えたい。アウグストゥスはアクティウム (Actium) の戦いを終えたあとローマに帰り、国家宗教復興に着手した。前29年8月半ばイリュリクム、アクティウム、エジプトでの三勝を祝して凱旋式を華やかに挙行したあと、神君ユーリウス・カエサルを称えて Divus Iulius 神殿を奉納した。同年、彼は伝統的に定められている員数以上に祭司を任命する権限を与えられている。祭司職の権威は、内乱の間はこの役職が顧みられなくなるまでに地に落ちていたが、アウグストゥスの政策によってふたたび大いに高まり、元老院議員や騎士身分の人々がその階級に応じて役職をふり当てられた。翌28年、元老院はローマ市内の荒れたままになっている全神殿の復興をアウグストゥスに委ねる旨決議した。そして彼は82の神殿を建て直し、10月9日にはパラティウム丘で彼の守護神であるアポルローの神殿を建てた。かくして、奇妙な対照ではあるが新しい時代の暮明けとともに旧来の神々が世界都市ローマの舞台表にふたたび浮かび上がってくるのである。この時代はホラーティウスが III₁₋₆ を制作したと考えられる時期（前29～27年）と平行している。この点に注意を払いつつこれらの作品で神々がどういうふうに扱われているかを考えていくことにする。宗教史的な考察は筆者の力の及ぶところではないので、あくまでもホラーティウスの文章に即して、III₁₋₆ の問題として捉えたい。

まずユーピテルから始めよう。

Regum timendorum in proprios greges,
reges in ipsos imperium est Iovis,

clari Giganteo triumpho,
cuncta supercilio moventis. (III_{1,5-8})⁴¹⁾

これは III₁₋₆ 全体の序としての第1聯に続くものである。第1聯をかく考えるなら、このユーピテルを称えるスタンザは、第1篇の序としてふさわしい位置を得ている。第5篇の第1聯でもユーピテルが言及され、第4篇では詩人の守り神ともいうべきカルリオペー (Calliope) が呼びかけられる。また、第3篇の序部（第2聯）では導入の形式は異なるが、やはりユーピテルの名がみられる。上記4行については、以下に続く10聯が内的な関連を維持しつつも、2聯1組の単位で緊密に結びあっており、また、ここであげられる神がアポルローでもユーノーでもなく、マルスでもなく、かれらすべてと人間の上に立つユーピテルであることから、第1篇の序とみなすことは可能であろう。

Giganteo triumpho は Zeus がオリュムポスの神々を従えて、挑戦してきたギガンテース (Gigantes) らと戦った時の勝利である。これによって Zeus はありとあらゆるものに対する支配権を揺るぎないものにしたとされる。Zeus はローマの神々の世界に入ってきて、すでにあったローマの主神ユーピテルと同化した。ユーピテルはカピトリウムの神殿に鎮座し、Iupiter Optimus Maximus として国家宗教の最高神の位置にあった。

このような背景をもつユーピテルをこの篇の前面にだしているのは意図的である。人間がいかに強大な勢力を誇ろうとも、たとえ王者であっても、ユーピテルの支配を免れることは不可能であり、ローマ市民たるもの、このことをよく認識しなくてはならないということであろう。雷光を発するユーピテル (III_{3,6})、ティターネース (Titanes) やギガンテースを雷霆をふるって倒し、地、海、冥界、神々や人類を一人でえこひいきなしに支配し (III_{4,42-48})、雷鳴おどろに

41) 「恐ろしい王たちは自分の民を支配し、王たち自身には、ギガンテースに対する勝利で名高く、すべてを眉一つで動かすユーピテルの支配が及ぶ。」

天界を治め(Ⅲ_{5,1}), また神々の王としてカピトリウムにあってローマを守護する(Ⅲ_{5,12}) ユーピテル。いずれの場合をみても人間の力をもってしてはいかんともしがたい絶対的な権威, 支配力を具えた神としての姿が表われている。この神はただ不正を罰するという事だけで満足することはない。もちろん詩人の言葉がこの点に重きを置いていることは、当然だが、同時につぎのごとく警告することも忘れてはいない。

……saepe Diespiter
neglectus incesto addidit integrum.

(Ⅲ_{2,29-30})⁴²⁾

自分を正しいとするだけではまだ十分でない、悪との交わりから遠ざからなければ、この神を満足させることはできないのだ。詩人はケレス(Ceres)の秘祭を暴露した者と屋根を共にしたり、同じ船に乗ったりはしないと主張する⁴³⁾。沈黙の方法を知らぬ者には報酬がない⁴⁴⁾、それどころか罪のない者までが、かかる神を恐れぬ人物と同じ家にいて落下する梁で押しつぶされとか、同じ船で旅に出て嵐に見舞われるなど、巻添えをくわされるのである。あらゆる形でなされる可能性のあるユーピテルの懲罰を免かれるには、それでは、不正をなさず、悪人を避け、然るべき時に沈黙を守るならばそれで事足りるのであるか。詩人がここでそれ以上の要求をしていることは *neglectus* という語から察せられる。この神を無いも同然に考えてはならない。長い内乱の果てに神域も荒れてしまったが、国内の平和が漸く確立されるにいたった今は、ユーピテルに、また他の神々にも、犠牲を供するなどしてかつての良き時代になされていた祭儀

42) 「しばしばディエスピテル(=ユーピテル)は、ないがしろにされると、罪なき者と悪人との見境なしに、罰をくだした。」

43) “vetabo, qui Cereris sacrum volgarit arcanae, sub isdem sit trabibus fragilemque mecum solvat phaselon” (c. III_{2,26-29}).

44) “est et fideli tuta silentio merces” (c. III_{2,25-26}).

を復活しなくてはならない。詩人はローマ市民にこのような積極的な姿勢を要求しているのではないだろうか。これが、第6篇の「神々に服している限り、汝は支配する」⁴⁵⁾ という表現に集約されているとみてよいだろう。

第6篇ではユーピテルという固有名は現われない。かといってこの神がこの詩で無視されているというのではなく、むしろそれ以上である。それは下記にみるとおり *di* という形に含まれており、ローマ人の語る神々の頂点にはつねにユーピテルが存在するのである。そして同じスタンザで神々に対する最大の侮辱が何であるかが、ふたたび *neglecti* の語で表現されている。

dis te minorem quod geris, imperas.
hinc omne principium, huc refer exitum:
di multa neglecti dederunt
Hesperiae mala luctuosae. (Ⅲ_{6,5-8})⁴⁶⁾

こう述べてつぎに詩人は、無視された (*neglecti*) 神々がイタリア (Hesperia) に、ローマの軍隊にどんな報いを与えたかを事実を挙げて語る。アントーニウスの代理としてシユリアの政務を担当していた L. デキディウス・サクサは前40年、パルティア軍の指揮者パコルスと戦い敗死した⁴⁷⁾。下って36年、アントーニウスはパルティア攻略を企てるが、その際オッピウス・スタティアヌスを指揮者とする一隊が、パルティアの王フラアテスおよびその將軍モナエセスの率いる軍隊に殲滅される⁴⁸⁾ などして、この戦いはアントーニウスにとって好運なものではなかった。いずれもパコルスとかモナエセスな

45) “dis te minorem quod geris, imperas” (c. III_{6,5}), 次注 46) 参照。

46) 「汝(ローマ市民)は神々に服している限り、支配する。ここからすべては始まり、ここですべては終るとせよ。ないがしろにされて、神々は、悲歎にくれるヘスペリア(=イタリア)に数多の災いをもたらした。」

47) Dio Cassius, XLVIII24~25. Pacorus は Orodes 王の子。この戦いは実際はローマ軍の元士官 Q. Labienus がパルティアに投じ、Antonius がエジプトへ去った際に乗じて Orodes 王をそそのかして始めたもの。

48) *Ibid.*, XLIX, 25.

ど外国人の名前ですぐ見当のつく事件であり、2世紀も3世紀も昔のことではない。続けてごく最近の事件も語られる。ダキア人の反乱とアクティウムの戦いである（ともに31年）。後者はここでは *Aethiops* という語で示されているが、これはエジプト人、すなわちアントーニウスとクレオパトラの率いる軍のことである。この戦いはとくにローマ市民の記憶に新しい。権力闘争の最後の場面として実際は内乱にほかならないのだが、ここでパルティア、ダキアなどと並んで外国との戦争のごとく扱われているのは、内乱に明け暮れしてきた世代全体への責めは当然のこととして、大きく国益を危うからしめた勢力（アントーニウス派）に対する非難がこめられているからであろう⁴⁹⁾。これらすべての危難はユーピテルその他の神々に加えられた侮辱、とりわけ神々を *neglegere* することの結果である、と詩人は語っているのである。

第6篇の内容の苦計に満ちた重たさは、第1聯に始まって“*damnosa quid non……*”以下の最終聯にいたるまで一貫している。この内容の重苦しさと、*di* という全体的な呼称による神々の表現の仕方との間に一つの関連をみることも可能ではないかと筆者は思う。この作品には、ユーノーもアポルローも、すでに述べたようにユーピテルでさえもその固有の名称をもって現われることがない。思うに、ユーピテルであれアポルローであれ、ひとたびその名が語られると、われわれはまずよく知られた神話的環境で、かつきわめて絵画的にかれらをとらえ、然るのちに文脈に応じて意味づけをするような傾向がある。当時のローマ人、とくにこのような作品を聴いたり読んだりしたであろうローマ人はどうだったろうか。かれらはいうまでもなく神々の物語についてはわれわれより以上に身近に馴染んでいた。ホメーロス以来の伝統はかれらローマ人の教養の重要な部分を占めていた。個々の神の機能は今日ではもはや知ることのできないものが多数あったかもしれず、絵画的表

現についてもわれわれの想像を超える多様性があったであろう。このような伝統によってローマ人は神々についてある程度きまりきったイメージをもっていたはずである。オリュムポスで永劫の生を営む神々の姿は不変であり、かれらはどのような危機に陥ろうとも、どのような難敵の攻撃にさらされようとも、最後はつねに勝利を得るのである。人々は神々自身の運命についてはつねに楽観を許されていた。しばしば図式的にとらえられ描写される神々の姿、そしてつねにそれにともなる楽天性は、第6篇の軽快ならざる響きに、この暗鬱な歌を制作している時の詩人の心を占めていたであろう深い思いに、そぐわぬものであるといてよい。ローマの現実を語って慨歎し、具体的に敬神の意義を謳って一条の希望を示さねばならない詩人は、常套的に神々の名に具わる“*fabulositas*,”を語る代わりに“*dis te minorem……*”, “*di multa neglecti……*”という表現によってより以上の厳肅さが生じることを期待したのではないだろうか。第1篇から第5篇までなんらかの形で現われる神々の姿（とくに第4篇）はここでは巧妙に隠されている。“*Pietas*”を取り戻すことがローマ市民の自己回復の条件であるとする詩人は、雷霆をふるうユーピテル、髪ふり乱してエンケラドスを追いかけ、その上にエトナ山を投げつけるミネルヴァ（アテーナー）、あるいはエピアルテースの左眼を矢で射るアポルロー等々の武勇譚や、その他のエピソードを語って読者に教養の再確認を許すようなことはしていられなかったのである。このようなことから第6篇の位置がいかにも妥当であるように思われる。神々を称える一連の詩篇の最後にあって、かれらを敬うようさらに念を押しているのである。とはいえこの位置をホラーティウスがそもそもから計画していたのだと考える必要はない。23年の詩集出版の際に、29年から27年にかけて一つずつ制作していた作品、詩律を同じくし、内容的に共通するもののある6篇を一個所にまとめたのであろうが、すでに述べたように第1篇の第1聯を新たに付け加えたと同じ意図で、第6篇を

49) G. Williams, *op. cit.*, p. 63.

現在の場所に置いたものであろう。

主としてユーピテルについて述べてきたが、ここでユーノーについても簡単に触れておきたい。ユーピテルの姉妹であり伴侶でもあるユーノーの言葉が第3篇で長々とつづられている。この話の核は正義であるとする Heinze の見方は妥当である⁵⁰⁾。ディオスクーロイ、ヘルクレース、バックス、そしてローマの建国者ロームルスらは正義を守ることによって神々の座に加わることができた。やがて第2の建国者ともいうべきアウグストゥスも地上で行なった正義の報酬としてこの輝かしい地位を得るだろう⁵¹⁾。ロームルスの神化が許されたのはこの女神が長い間いだいていたトロイヤに対する憎悪を漸くにして捨てたことを意味する。いわゆるパリスの審判によってユーノーはミネルヴァともども、ウェヌスに美神の座を奪われた。その時ウェヌスは世界一の美女を与えるとの約束で若い判定者も買収した。だからトロイヤの王子パリスは彼女にとって、墮落した判定者 (*incestus iudex*) となったのである。彼女の心の奥には、パリスの判定が、彼女の美しさを見下したこの不届千萬な判定が怒りの火種となって残るのである⁵²⁾。美神判定について裁判の公正という語によってよく把握される正義の概念を当てることもできよう。人間が同じ人間を欺いたのではなく、神神に不正を働いたのだ。パリスはスパルタ (ラケダイモニア) の王妃ヘレネーを誘惑して祖国へ向かう。ユーノーにとってはヘレネーももはや姦婦でしかない (*Lacaena adultera*)。このヘレネー掠奪に端を発した戦争でトロイヤは滅亡し、辛うじて脱出したアエネアースとその一党もユーノーの憎悪を浴びて数々の危機に見舞われる⁵³⁾。しかしこのようないわば民族的遭難

がもつぱら美神競争における不公平な判定というまったく個人的な問題にのみ起因するものではないことは、ここでホラーティウスが当の女神に語らせている言葉からも明らかである。それよりもっと大きな罪をトロイヤの祖ラーオメドーンが犯しているのだ。

……ex quo destituit deos
mercede pacta Laomedon, mihi
castaeque damnatum Minervae
cum populo et duce fraudulentio.
(Ⅲ.3:21-24)⁵⁴⁾

ラーオメドーン (トロイヤ戦争当時の王プリアモスの父) に凶られた神々はアポルローとネプトゥーヌス (ポセイドーン) である。二神はそれぞれの方法で (前者は疫病, 後者は海の怪物を送って) 即座に復讐したといわれるが、しかしこのような不敬が忘れられるべくもなく、ついには国家滅亡にいたった。

トロイヤを離れ新しい土地を求めて放浪したアエネアースの子孫ロームルスは、マルス神とアルバ・ロンガの王女レア・シルウィアとの子であるとされる。祖国を失ったアエネアース、それでもひたすら敬虔 (*pius*) であり続けるこのトロイヤの英雄がいかにか苦難に満ちた運命に身を委ねたかということは、ローマ人にとっては建国前史の最大の話題である。ユーノーの恨みを一身に受けたアエネアースの血をひくロームルスが同じ目をもて不思議ではない。だが、ここで女神は胸中に燃え続けていた憎悪の火をついに消すことを決意する。戦争ではトロイヤに荷担し、トロイヤの血をひく娘とちぎってロームルスを生ませてわが子ながら天晴れな親不孝を働いたマルスを許し、そしてローム

50) Richard Heinze, *Vom Geist des Römertums*, 1960², S. 200.

51) “quos inter Augustus recumbens purpureo bibet ore nectar” (11~12).

52) “manet alta mente repostum iudicium Paridis spretaeque iniuria formae” (Verg. aen. I₂₆₋₂₇).

53) Verg. aen. では “mulum ille (=Aeneas) et terris iactatus et alto vi superum saevae memo-

rem Iunonis ob iram” (I 3~7) という記述に始まってしばしばこの憎悪がアエネアースの一行を危機に陥る様子が描かれる。

54) 「(トロイヤは) 神々をラーオメドーンが約束の報酬を与えずに騙して以来、国民も不正な王と共に、私とけがれないミネルヴァに引き渡された。」

ルスをその父の手に委ねる。つまり神々の列に並ぶことを認める。それは神々の内輪もめで長びいていた戦争が終わった⁵⁵⁾からでもあるが、とくにロームルスが、いとわしいトロイヤにつながる者であるにもかかわらず、ディオスクーロイやヘルクレースらと同様に、この世で正義という徳を实践したからにほかならない⁵⁶⁾。彼は神となってクイリーヌス (Quirinus) と呼ばれ、まばゆく輝く天の館に入って *nectar* の味に親しみ⁵⁷⁾、神々の一員たることを許される。

詩人は、ロームルスについて、地上に生きる者でありながらもやがては神々の座に加わるであろう人物が誰であるかを、すこぶる視覚的な方法で表現している。“quos inter Augustus recumbens/purpureo bibet ore rector” (11~12)、すなわち、ほかならぬアウグストゥスが、すでに神になっているかつての英雄たちとともに、そしてユーピテルその他の神々とともに *nectar* を味わうことになるろう。ホラーティウスがみるところ、アウグストゥスも「正しく、意志強固なる男」⁵⁸⁾であり、またそうでなくてはならないのである。彼が神となることはユーノーに認められているとの含みで、詩人は女神にローマのとるべき道を語らせているようである。ローマはメーデー人、すなわちパルティア人を征服し、ジブラルタル海峡 (medius liquor) や、ナイルの氾濫する地方、つまり当時のローマ版図の隅々までその恐るべき名を広めるであろう (44~48)。そしてローマ市民は黄金を地中

にあるがままに放置して食欲を遠ざけ、勇武をもって外敵に対し、版図をさらに広げるだろう (49~56)。アウグストゥスがこの市民の指導者であり、Capitolium、すなわちローマは永遠にその輝きを捨てぬであろう、とユーノーは予言する。しかし最後に女神は、赫々たるローマの未来を約束しながら、その盛栄が達成されるための大きな条件をはっきり言い渡す。

sed bellicosis fata Quiritibus
hac rege dico, ne nimium pii
rebusque fidentes avitae
tecta velint reparare Troiae.(III.3,57-60)⁵⁹⁾

Nimium pii は、Heinze がいうように⁶⁰⁾、パラドックスである。というのもここでの *pietas* は祖先に対するものであるが、祖先を敬う心情に過剰という概念は本来無縁なはずだから。しかしその祖先がトロイヤで栄えた一族のこととなると問題はまったく異なってくる。ラーオメドーンやパリスの行為は不正、破廉恥そのものとして神々にとっては忘れがたいものとなり、それゆえトロイヤが灰燼に帰したとはユーノーが語ったところである。それは当然守られるべき正義が蹂躪されたことに対する神々の深い憤りの現われである。正義を守ることは神意に添うものであり、然らざる者を罰するのも神々の意志である。ラーオメドーンの罪は滅亡を引き起こした原罪ともいべきもので⁶¹⁾、彼を祖とするトロイヤに神々の祝福が与えられるはずはなかった。神々に祝福されない都市を復興する (tecta reparare) ことは、それが自分の祖国であるにしても、ふたたび神々に背を向け、二重に正義を踏みにじることになる。すなわち正義を守ることが敬神の徴しにほかなら

55) “nostrisque ductum seditionibus bellum resedit” (III.3,29-30).

56) “hac Quirinus Martis equis Acheronta fugit” (*ibid.*, 15~16). なお Ovid の “inavidus conscendit equos Gradivus (=Mars)……reddentemque suo non regia iura Quiriti abstulit Iliaden (=Romulum)” 参照。

57) “discere nectaris sucos.” *ducere* との読み方もある (Page, Wickham, Williams) が、人間から神になったロームルスの初々しさを示す表現として Plessis (Frédéric, *Oeuvres d'Horace: Odes, Épodes et Chant Séculaire*, 1966²) の解釈に従いたい。discere をとるのは他に Heinze, Villeneuve, Klingner としてもっとも古い Porphyrio など。G. Williams, *op. cit.*, p.43.

58) “Iustum et tenacem propositi virum” (III.3,1).

59) 「だが私はこの運命を、好戦的なクイリーヌスの民 (=ローマ市民)に、祖先を尊ぶのあまり、また自らの幸運におごるあまりに、祖国トロイヤの家々を再建しようなどと考えぬように、との条件で語っているのだ。」

60) Kiessling-Heinze, *ad loc.*

61) “satis iam pridem sanguine nostro Laomedontae Iulimus periura Troiae” (Verg. *georg.* I.601-2).

ない、と詩人は女神の口を藉りていつているのである。トロイヤ再興は瀆神の謂である。ここで問題にされているトロイヤ (Ilion) には、つい最近まで内乱の連続で荒みきったローマの姿が仮託されており、ふたたびそのような状態に戻ることはないようにとの警告がなされていると考えることは可能である⁶²⁾。同時に、というよりはそれ以上に、神々を尊ばねばならぬということを経典に即して詩人が訴えているものと筆者は考えたい。とすれば、第3篇の序部にあたる1~4スタンザに登場する英雄たち (神になった、あるいはなるであろう英雄たち) がかつての ἀλεζικακοί, すなわち人類の救済者で自らの ἀρετήによって天に達した人々の典型であり、かれらの中に “iustus et tenax propositi vir,,” という理想像が具体化されていたということももっともであるが、このような理念を盛った詩もただそれだけでは、そもそもから “monumental cycle” の一部を構成することになっていたこの作品に “sufficient scope” を与えないであろうから、ホラーティウスは神話的場面を利用して “size of the ode” を大ならしめると同時により強く想像力に訴えようとしたのである、とする説⁶³⁾はいくぶん一方的であるように思える。これは、第3篇が、似たような構成をもつ第5篇とともに、シリーズ中もっとも重要な第4篇を前後から囲んでそれ相当に浮彫りにするため、いわば枠としての役割を果たすべく最初から考えられて成った作品であるとする主張につながる⁶⁴⁾。もしもホラーティウスが最初から、ある “monumental cycle” なるものを企てていたとするなら、それはそれで確か

に考えられることである。筆者はしかし詩人がこの6篇をそもそもから密接に関連させて一つの “cycle” の構成部分とし、その大きな枠の中で一篇ずつ仕上げていったという考えは取らない。確かに第5篇 (Caelo tonantem) は、第3篇の女神の話と同じような形式でレーグルスの言葉がつづられる。その内容は、捕虜交換交渉のためカルタゴから故国ローマへやってきたレーグルス⁶⁵⁾が、わが身を省みず、下手に交換するのはローマの恥を上塗りするだけだ、と諫止するというものである。ローマ軍の名誉をいかに維持するかということがテーマであり、ユーピテルが守ってくれるはずなのに、なんらなすことなく敵軍に降って祖国と神々を侮辱したカルラエでのローマ兵士たちの不名誉を、かつてのレーグルスの行為によってさらに強く印象づけようとして、その内容の重々しさは第3篇に劣らない。だからといってこの枠が最初から計画されたものであるとする根拠にはならない。3, 4, 5 各篇にはアウグストゥスの名 (3, 5 で Augustus, 4 で Caesar として) が現われていて、ある時期 (たとえばオクターウィアヌスが Augustus という称号を得た時期など) 詩人がこの枠組みに想到したのでは、という仮定を可能にしている。この時期をわれわれは、これらの詩篇が制作された時点ではなくて、むしろ出版された時点においてであったと考えたい。しかし、みてきたように、なによりも重要なのは第3篇における神々の位置である。これはなんらかの枠組みとは関係なしに第3篇をそれ自体として独立したものと考えさせるに十分である。ユーノーの長い話は、まさに神々について考察することの重要性を読者に強く印象づけるために要求されたのだ。もしも枠を考えるなら、それは、詩人が

62) L.P. Wilkinson, *Horace and his Lyric Poetry*, 1968, p. 74. Suetonius の “fama percubuit migraturum Alexandriam vel Ilium translatis simul opibus imperii” (Caes. 79, 3) にみられる Iulius Caesar の遷都計画にアウグストゥスが関心を示したことに反発して詩人が女神にかく語らせたとする説は有力でない。Fraenkel, *op. cit.*, pp. 267-68 参照。

63) Fraenkel, *op. cit.* p. 269.

64) *Ibid.*, p. 270.

65) M. Atilius Regulus. 第1次ポエニ戦役のさなか、アフリカでクサンティップス率いる敵軍と闘って敗れ捕虜になる(225年)。のちに(250年頃)捕虜交換交渉の使節として仮釈放されローマへ来たが、元老院で交換無用を訴えた。キケロは彼が “reddi captivos negavit esse utile, illos enim adulescentes esse et bonos duces, se iam confectum senectute” と主張したと伝えている (de off. III₁₀₀)。

23年にいたって各編を検討したときに、これらを相前後して並べた方がよいと判断した結果生じたであろうところの III₁₋₆ という枠であり、また神々の復活を繰り返し呼号することが必要とされた時代環境という大きな枠であろう。神神への関心は別として、第3篇の独立、少なくとも制作された時点での独立を肯定させるなよりの証拠がそのエピローグ⁶⁶⁾である。他のローマ市民歌いずれをみても、抒情詩人としての個性をこれほどあざやかに主張して局面を急転させつつ終わる例はない。第5篇では、第3篇とは異なって、レーグルスが心静かにローマを去る姿が述べられており、最後までこの人物が場面を支配する。この自己主張のあと詩人は改めてムーサエのひとりカルリオペーに“Descende caelo”と呼びかけて第4篇を歌い出すのである。

さて、ユーピテル、ユーノーと述べてきたが、その他の神々についてはもう子細に検討する必要はあるまい。問題の6篇で神々の占める位置がいかなうものであるかは、上記2神に関する考察でだいたい明らかにされたと思う。名前が出ているのはマルス、ミネルウァ（4の57では Pallas）、アポルロー（3の66, 4の4では Phoebus）、ウルカーヌス、ディアーナなど。オリウムポスの神々と闘って敗れるわが児らに涙する大地母神 Terra（4の73）。第4篇ではこの神々が怪物どもを相手に戦うさまが絵巻物ふうに表示される。ティターネース、アロイダエ（オートスとエピアルテース兄弟）、テュフォエウス、ミマースその他のギガンテース⁶⁷⁾らである。かれらは時にはユーピテル自身にさえ恐怖を与えたほどであった。しかし神々の勝利はつねに確実である。怪物どもがいかに巨大で腕力にすぐれていても、己れを見失った不遜な挑戦はただ敗北を招くにすぎない。詩人がこの図式的勝敗をここで述べた理由は65行の「分別を欠く力はみずか

らの重みで崩れる」⁶⁸⁾ という格言的な表現によってすぐ理解できる。神々に挑んだ怪物どもが自分の力を恃むあまりに敗れ去ったのは当然であるが、それはたんにかれらについてののみいえることなのではなく、人間についても同様である、とするホラーティウス自身の意見、*sententiae* (70)を強調するためにほかならない。ここでもまた、神々との関係における人間の罪と罰⁶⁹⁾の問題が提示されていることを指摘したい。さて、怪物どもを相手に活躍する神々の中で、ユーピテルは別にして、アポルローの特別扱いが注意を引く。カスターリアの泉で乱れ髪を洗い、リュキアの叢林や故郷の森に住むデーロスの、パタラのアポルローという表現（61~64）が戦闘記述に続く。これは叙事詩にうってつけの題材を扱いながらもつい表に出るホラーティウスの抒情詩人氣質を示す⁷⁰⁾もので、第3篇の最後のスタンザに似た趣きがある。ここではしかしこれが結びになるのではなく前述の“vis consili expers……”がきて本筋に戻り、なにゆえこの戦いを語ったかが明らかにされる。詩歌、音楽の神としてのアポルローが強調されたものであろう。

む す び

以上にみてきたごとく、III₁₋₆の各篇には、オリウムポスの神々に対する敬意を喚起しようとする詩人の熱意がうかがえる。アウグストゥス（当時はオターウィアーヌス）が元老院から神殿再建事業を委ねられたのは前28年で、彼自身82の神殿を再建したという。この点からすると、ペシミスティックな表現に託して神々の復活を詩人が要求している第6篇は、この28年の政策

68) “vis consili expers mole ruit sua.”

69) その *sententiae* を証する例として挙げられる (79~80) Orion, Tityos, Pirithous ちをもって、詩人は、Antonius と Cleopatra をめぐむ状況を暗示しているとする説も多い。

70) 同時に、28年アウグストゥスが31年のアクティウムの勝利を感謝してバラティウムに神殿を建ててこの神に捧げたこととの関連も考えられよう。

71) 本文51頁。

66) “non hoc iocosae conveniet lyrae. quo, Musa, tendis? desine pervicax referre sermones deorum et magna modis tenuare parvis” (III_{3,69-72}).

67) ここで詩人は Titanomachia と Gigantomachia をとくに区別していない。

と密接に関係していることは明らかである。しかし、ホラーティウスがこの詩を書き終えた時点で、どれだけの神殿がかつての面目を取り戻していたかといったことはあまり意味がなく、また、この作品が、28年の元老院議決の直前に成ったかあるいは直後であるかということもさして問題にならない。いずれにしろわれわれはそこに、新しい指導者、過去の争乱を根絶して国内の平和を確立し、国外ではますますローマの威を高めるに違いないと期待される指導者が、過去は過去としてあくまでも前向きに打ち出した政策への詩人の共感、実際には共和制を崩し独裁の方向を取るはずの指導者がそれにもかかわらず、他のいかなる政治家よりも優れて堅実に人々の心に値えつけようとする新時代の希望に寄せる詩人の誠実な称賛を読み取れば十分であろう。同時にそこで政策の走狗としての詩人、皇帝の伝令官としての詩人の姿を想像することは問題にならない。内乱で辛酸を嘗めた⁷²⁾詩人自らにも、ウェルギリウスらと同様に、アウグストゥスにこの政策の実践を迫ったと同様の深い思いがあったのである。あえていえば、もし詩人がアウグストゥスの立場にいたとすれば、やはり同じ政策を云々し、かつ実行したかもしれぬ、ということをも誰も不定することはできないだろう。このような共感をもって詩人はオリュムポスの神々の復活を唱えているのである。前章冒頭で、詩人のこの要求は国家指導者に向けられた信頼、友情の然らしむるところではなかろうかと筆者はいった。友情の語はあるいは情緒的で不適切であるかもしれないが、ここでこれを、ローマの未来をもっぱらバラ色にのみ塗り染めて望むことを決して許さない現在の社会状態に関して両者が等しく抱いている不安⁷³⁾、という意味での共感の語をもって置き換えれば

納得できよう。理想の一致は友愛の源泉である。かつてはエピクロス哲学を奉じていたとみえる彼はある日一片の雲もない空から雷鳴のどろくのを聞いて、かつての哲学を“*insaniens sapientia*”⁷⁴⁾ といったことがあるが、この一事をもってⅢ₁₋₆制作当時エピクロス主義から脱却して、すっかりストア派になっていたと断定することはできない⁷⁵⁾。かくして各篇を通じていわば基音として流れ、第6篇にいたって結論的に表現される主張の因って来たところはこの友情、共感にあるとあってよい。ここでは自己の信念と国家理想⁷⁶⁾との相剋が予想され、直ちに、詩人はこの時点で後者のために前者を投げ捨てて新たな信念を獲得したのかという疑問が出る。2,000年前の時代に生きた人間が本質的にいつその主義なり信仰なりを変えたかということは明確には把握しがたい問題である。ホラーティウスは死ぬまでエピクロス派であったかもしれないのだ。とすれば彼の神々のための要求は彼の“*manière de vivre*”を偽わるものではないかとも考えられる。さもあらばあれ、矛盾を矛盾としてあるがままに生きたのがローマ市民にして抒情詩人たるホラーティウスであり、彼の中には人間の生活がさまざまな段階で出会う個人的なものと公的なものが緊張関係のうちに共存し⁷⁷⁾、そのあり方がとくにⅢ₁₋₆で表現を与えられているのである。一方が真実なら他方も同様に真実である。

筆者には、28年前後という年代よりはむしろⅢ₁₋₆が23年に出版されたという事実の方がいっそう重要に思える。一般にこの6篇は前29年から27年にかけてできたものであるといわれるが、そうすると、少なくとも4年の期間をおい

74) 注 39) 参照。

75) Pöschl, *op. cit.*, S. 157. Wilkinson, *op. cit.*, p. 27. Heinze はホラーティウスやウェルギリウスはアウグストゥス時代初期においては徹底したエピクロス派だったが、のちにこの指導者の奉ずるストア神学に転じたとする (Aug. Kul. SS. 50-54).

76) Heinze によればアウグストゥスの宗教政策はストア哲学を根拠にしたものという (*ibid.*).

77) Pöschl, *op. cit.* とくに 144-46, 167-68頁。

72) ピリッピイでは Brutus の軍に投じて不慣れな戦いを経験したあげく敗走し、帰国してみると財産没収で無一文になった (epist, II_{2,46-51}).

73) Viktor Pöschl, 'Horaz und die Politik' (1956), *Prinzipat und Freiheit*, herausgegeben von Richard Klein, 1969, S. 144.

て出版されたことになる。4年の年月は問題によって長短いずれとも定めがたい。ここでは、28年前後の新時代の雰囲気の中で書いた作品の内容、価値を、詩人自ら23年においてもいささかも否定することがなかったと考えてよいだろう。とくに問題なのはローマの将来を暗鬱な調子で語った第6篇であろう。

Fraenkel は、この詩が23年の編集出版の際に除外されなかったことについて二つの理由をあげている⁷⁸⁾。一つは“topicality”は偉大な詩を判断する“criteria”の数に入らないこと。もう一つは、ホラーティウス自身はペシミストだったのではなく、人間性を見定めるに達者な観察者だったので、数年の平和が続いたにしても、また27年早々に制度改革がなされた後であっても、ローマの政治的、道徳的な安定はまだまだ当てにできない、と考えたでもあろうということである。いずれももっともな意見であるが、後者に即してもっと具体的に付言すれば、アウグストゥスが神殿の新設・再建、華やかな祭儀挙行をもって、いかに熱心に国家宗教の復活を図り、信仰を奨励しても、一般大衆はなかなかそれに応じてこなかった、そして詩人はこのような状況を見逃さず、焦燥も手伝って、第6篇を現在の位置に置くことが必要であるとしたのであろう。大衆の無理解については Heinze が語っている。彼はこの信仰の問題についてローマの大衆とその他の地方の住民とを分けて考える。地方人はイタリア古来の土着信仰を守り続けていた⁷⁹⁾。かれらの信仰の対象はアウグストゥスの国家神よりは、むしろもっと小さい神々、たとえば Lares や第2の *ich* としての Genius,あるいは Silvanus とか Faunus などの鄙辺の神々であった。問題は主都ローマの民衆⁸⁰⁾で、かれらを国家祭式の復活によってふたたび掌握することはきわめて困難だった。ストア神学にもとづく信仰は、信仰とはいっても学問のうちである。首都の大衆は学問とは無縁であり、スト

ア派の哲学もエピクロスのものもこの平面では何の影響も与えなかった。その代わり共和制末期から、みすばらしい形^{なり}をして自らストアの哲学者と称する人々が活動を始め、ポセイドニオスよりはむしろ伝えられるところのディオゲネス (*ὁ κίτων*) に似た流儀で民衆を慰めたり励ましたりした。かれらの言葉の内容は高邁な哲学とか学問といったものではなく、卑近な生活の知恵であった。そして人々はこの街の哲学者たちの言葉に熱心に聞きいったという。さて、本来の信仰が失われ、かつ学問がそれに代わっているわけでもない時代には容易に迷信がはびこる。ローマではそれは魔術の形で出現した⁸¹⁾。これは東方からやってきた。同じく東方から伝わってローマ大衆の心をとらえ(ストアの擁護もあったが)、アウグストゥス以後の時代には皇帝までも巻き込んで盛んになった信仰が占星術⁸²⁾である。このようにして外来の信仰を受けいれる土壌がローマにはできていた。すでに以前からローマでは、非ギリシャ神格としてはリュギアの母神キュベレー (Cybele) がただ一つ認められていて、“exotische kuriosität”として根づいていた。それから、数を増して続々移住してくるユダヤ人たちはヤハウェ (Jahwe) 神をもたらす⁸³⁾。この神は、信者に、本来、楽天的なローマ人には想像もできないような厳しい要求をし、またモーセ以外の人間には姿を見せたことがないなどの点で、国家的見地からの害はまだ考えられなかった。しかしエジプトからきたイシス (Isis) 信仰となるとはや異国趣

81) ホラーティウスは, epod. V. XVII, sat. I. などでは *Canidia*, *Sagana* などといった女魔術師の行状を描いて攻撃したり揶揄したりする。ティブルスにも魔術に関する記述があり (I, 41-64), 流行ぶりがうかがえる。

82) ホラーティウスの小品 c. I₁₁ は *Leucone* なる乙女にバビロニア (カルデア) 式計算, つまり占星術をやめたがよいと勧める。33年 Agrippa は魔術師と占星術師を都から追放した (*The Cambridge Ancient History*, X, p. 474)。

83) (ホラーティウスにもユダヤ教徒に関する記述がある。sat. I, 66-71)。友人同士の気楽なやりとりでユダヤ教徒の習慣が話の種になっている。ここで詩人はこの宗教を迷信扱いしている (*nulla mihi religio est*)。

78) Fraenkel, *op. cit.*, pp. 287-88.

79) Heinze, *Aug. Kult.* SS. 48-49.

80) *Ibid.*, p. 57以下。

味といったものではなく、まだ組織的な宗教政策のなかった共和制末期にすでに小規模な神殿、拝殿といったものが造られていて、首都の細民をその魅惑の虜にしていたのである。イシスを代表とする数多の外来の神々が民衆の中へ深く浸透したのは、この神々がアウグストゥスの喧伝する神々より以上にかれらの深刻な宗教的欲求に訴える力をもっていたからであり、苦痛も感動もないオリュムポスの神々とは違って、この地上に生き苦しみ死ぬという性格によってより大きな感動を招いたからである。さらに世紀末にいたっては遙かなベツレヘムで Jesus Christ が誕生する。このユダヤの新しい神が新

紀元に入ったローマ市民にどんな影響を与えたが、それゆえにローマ国家との間にどんな確執を演じたか、周知のとおりである。

このような時代の流れの一点としてわれわれは23年を考えなければならない。一言にしていえばアウグストゥスの宗教政策は期待した成果を上げることはできなかったのである。詩人が28年前後、折にふれてこれらの詩篇に託した嘆息は、4年の年月を置いても弱まるどころか、むしろいっそう息苦しく強まっていったというのが実情であろう。そしてこの嘆息をより多くの人々に伝えることが、争乱を厭い、国を愛する詩人の義務となったのではないだろうか。